

コロナ禍のアメリカ渡航

児玉香菜子

はじめに

筆者は2020年10月末から2021年3月中旬までの約4か月、ペンシルベニア大学の *visiting scholar* として、家族4人でアメリカに渡航、滞在した。家族の内訳は、筆者と夫と子供2人（2020年10月時点で5歳と3歳）である。滞在中は民泊紹介サイトで見つけた70代白人夫婦の家にホームステイをした。本稿ではコロナ禍におけるアメリカ渡航の経緯と家族滞在について報告する。具体的には、アメリカへ渡航するまでの経緯、アメリカ入国、ホームステイ家族、大学訪問、新型コロナ対応、街の様子、差別等である。最後に、簡単にコロナ禍におけるアメリカ滞在を振り返りたい。

1. アメリカへ渡航するまで

従来の計画

筆者は2020年4月から翌年3月まで1年間サバティカルを取得することができた。千葉大学では勤務期間が7年経過するとサバティカルの申請が可能になる。筆者が所属する日本・ユーラシア文化コースでは内部で調整しながら、もちまわりで毎年取得者を決めていた。筆者はサバティカル中に海外での研究活動を考えており、まだ小さい子どもがいることを考えると子連れになるため、ちょうど上の子が小学校に入学する前までにと考えていた。その最終リミットが2020年度だった。結局、2020年度に無事にサバティカルが取得できた。夫も上司と相談し、1年休職し、家族4人での渡航予定を立てることにした。

サバティカルでは中国内モンゴルや北京、モンゴル国での調査研究も考えたが、ぜひ一度欧米の研究機関に身を置いて研究に取り組むとともに、学術的な交流を深めたいと考えていた。以前から渡航先にと考えていたペンシルベニア大学のアトウッド先生に連絡をとり、2019年秋ごろから本格的に準備をはじめた。

氏は世界的なモンゴル研究の第一人者で、その学識は広く深く、2023年には元朝秘史の英語訳を出版する予定だ¹。期間は1年で、受け入れ身分は *visiting scholar*（訪問研究者）である。アトウッド先生と初めてお会いしたのはモンゴル国で、昭和女子大学のフスレ先生がモンゴル国で2009年に主催した国際シンポジウム「世界史のなかのノモンハン事件（ハルハ河会戦）—過去を知り、未来を語る—」だった。その後、科研プロジェクト²で日本に招へいし、交流が続いていた。その後、アトウッド

¹ Christopher P. Atwood., *The Secret History of the Mongols*. Penguin Classics.

² JSPS 科研費、基盤研究 (S) 21221011 「牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明と

先生はペンシルベニア大学に移り、現在は Esat Asian Languages and Civilizations の学部長である。アトウッド先生がちょうどまだペンシルベニア大学に移ったばかりのころに来日されお会いした。その際に、こちらからサバティカルでの受け入れを打診しようかと思いがぐねっていたところ、向こうからサバティカルでよかったらと声をかけてくださっていた。

アメリカに1年滞在とはいえ、今村薫教授による科研プロジェクト³の一環で2020年4月にはオックスフォード大学で desert conference、7月にはモンゴル国モンゴル・ホスタイ国立公園で国際会議とフィールドワークに行く予定であった。その前後と8月には日本に戻る予定を立てていた。また、モンゴル語でツァガンサルと呼ばれる旧正月にモンゴル国でフィールドワークをしたいとも考えていた。モンゴル国のツァガンサルは旧暦のため、毎年時期に幅があるものの、ちょうど1月下旬から2月上旬で、卒論関連行事や入試など1年で最も忙しい時期の一つにあたる。そのため、なかなか海外渡航がむずかしいのだ。

新型コロナ発生と渡航延期

渡航準備に取り掛かる中で発生したのが新型コロナウイルス感染症（COVID-19、以下、新型コロナ）であった。2020年1月から中国武漢市での新型コロナの発生とその被害が報道されるようになり、徐々に、かつ急激にその深刻さが増していった。

そうしたなかで、筆者は2020年1月29日から2月28日までの1ヶ月間、千葉大学外国人研究者として科研プロジェクト⁴の共同研究者のサラングレル中国中央民族大学教授を招へいた。これは事前に計画を立てていたものであったが、新型コロナの感染拡大報道とともに、中国北京在住のサラングレル先生の出発直前にその受け入れについて迷いが生じた。当時、中国への渡航や中国からの受け入れ制限はまだ課されておらず、そのため、千葉大学でも受け入れ中止要請はなく、サラングレル先生からも問題ないとの連絡をいただいた。よって、そのまま予定通りに来日していただくことにした。その後2、3日して状況が変わり、より緊迫したムードになってきた。というのも、1月23日に中国の武漢市で都市封鎖が始まり、外務省が1月24日付けで武漢を含む中国湖北省全域を「レベル3：渡航はやめてください。（渡航中止勧告）」に引き上げたからである。こうしたなかで、サラングレル先生は何の障壁もなく無事に来日滞在され、予定通り帰国された。本特集の李報告にあるように2022年10月現在まで、中国は中国入国者に対して強制的なホテルでの隔離を義務付けている。当時まだその決定前だったため、サラングレル先生は北京の自宅隔離2週間ほどで済んだ。とはいえ、大

その現代的動態の研究」（研究代表者：嶋田義仁名古屋学院大学教授）。

³ JSPS 科研費、基盤研究（A）18H03608「中央アジアにおける牧畜社会の動態分析—家畜化から気候変動まで」（研究代表者：今村薫名古屋学院大学教授）。

⁴ JSPS 科研費、基盤研究（C）17K03274「中国社会主义体制下モンゴル牧畜民女性の都市化過程における社会進出と生活経験」（研究代表者：児玉香菜子）。

変な苦勞だったと思う。

新型コロナへの脅威が日増しに拡大しつつあるなか、アメリカ渡航にかかるビザ取得に必要な書類の手続きを進めていた。そうしたなかで、アメリカ政府は2020年1月31日に新型コロナの大流行に対処するため、最近中国へ渡航した履歴がある外国人および中国からの渡航者の入国を禁止すると発表した⁵。これを受けてか、アトウッド先生にアメリカの新型コロナの状況を尋ねた際には、中国に渡航しないようにくぎを刺された。

ビザの準備とともに、アパート探しも並行して始めた。アトウッド先生より家族で滞在しているモンゴル人留学生を紹介していただいたり、不動産屋に問い合わせをしたりした。

今回の渡航ビザはJ-1 交流訪問者ビザで、家族はJ-2 ビザになる。ようやくビザの取得に必要なDS-2019を入手し、3月10日にアメリカ大使館にビザの申請の面接に行った。大使館の外には20人くらいの行列ができていた。面接をしたカウンターにジェル型の大型の消毒液が置かれていて、使ってみるとミントのようなツンとした匂いがしたのを覚えている。

3月に入ると一斉休校が実施され、千葉大学でも卒業式や卒業関連行事が次々と中止になっていた。こうした状況下にあったことから、航空チケットの手配については様子見をしていた。受け入れ先のペンシルベニア大学からいつ来るのか、もう来たのか、健康状態についての連絡が来るようになっていた。

3月16日には4月に開催予定だったオックスフォード大学での *desert conference* の中止の連絡がきた。

そして、3月18日ちょうどビザを受け取った日に、ペンシルベニア大学より受け入れを2か月後の2020年6月2日まで延期するという連絡がきた。そのため、渡航を当面見送ることとした。もうそのころには4月にアメリカに渡航するのはむずかしいだろうと漠然と考えていたところだった⁶。アトウッド先生にその旨を告げると、渡航延期がよいであろう、大学はまるで「砂漠」みたいだ、とのことだった。

再度の渡航準備

2020年4月に入ると、日本で非常事態宣言が出され、千葉大学は1か月ほど授業開始を遅らせた後、すべてオンライン化、それもオンデマンド授業に切り替えた。オンデマンド教材の作成およびアップロードなど、すべてがとても大変な作業であったと聞いている。

⁵ ESTA Online Center 「米国政府 中国からの入国を制限し2月2日に緊急事態宣言」

<https://esta-center.com/news/detail/005350.html> 2022年11月2日閲覧。

⁶ 同日には米国政府は在日大使館および領事館での非移民ビザ、移民ビザを一時停止し、予約済みの面接がすべてキャンセルになっている (U.S. Embassy & Consulates in Japan 「Suspension of Routine VISA Services」 <https://jp.usembassy.gov/suspension-of-routine-visa-and-notarial-services> 2022年11月2日閲覧)

5月には、7月のモンゴル・ホスタイ国立公園で開催する予定だった国際会議とフィールドワークもモンゴル国への入国がかなわないことから中止になった。

入国延期期限の6月になると、アメリカ国外に滞在しており、新規に取得するJ-1を含む非移民ビザでのアメリカ入国が2020年12月31日まで停止された。幸いにも、すでにビザの発給を受けている場合は対象外だった⁷。

このようにアメリカへの入国制限が厳しくなっていたが、ペンシルベニア大学からさらに渡航を延長するとの連絡は無かった。とはいえ、まだ世界中で感染拡大が続いている状況であり、渡航をどうするかについてアトウッド先生に連絡してもやはりまだむずかしいようで、様子見をしていた。

渡航が延期になってからしばらくは(故)赤木祥彦福岡教育大学名誉教授から寄贈を受けた乾燥地研究および沙漠化資料の整理に取り組んでいた。8月に入り、ちょうど、赤木先生の整理にもめどが立ち、かつ、感染が一時的にせよ収まってきたこともあり、渡航にかなり前向きになってきた。やり取りしていたフィラデルフィアの不動産屋さんに尋ねても落ち着いてきているとのことだった。また、逆にこの機会を逃すとまた感染者が増加し、渡航が困難になることが予想された。

9月になり、ペンシルベニア大学で新学期が始まると、アトウッド先生は完全にオンライン化したゼミに参加を呼びかけしてくださり、Zoomによるゼミに日本から参加できるようになった。時差のため、ゼミの開講時間は夜中であったが、むしろ家族が寝静まった後になるため集中して聴講できた。とはいえ、アメリカ国外にいたままでは、ペンシルベニア大学に正式に所属したことにならないため、IDが付与されず、授業サイトや図書館などが利用できないでいた。

こうしたなかで、9月に入り、家族と相談し、渡航することに決めた。その大きな理由としては、すでにビザを取得しているため渡航可能なこと、2020年に行かないと子どもの義務教育が始まり、次に行くのは困難であること、夫は海外渡航のために休職しており、同じく今後こうした機会はそうそうないことが予想されたためである。

いざ、渡航を決めると、まず、ビザの問題が出てきた。ビザは発行から1か月以内に入国することとなっている。しかし、こちらの都合ではなく、先方によるものだから、そのまま渡航しても問題ないだろうと思っていた。とはいえ、渡航延期期限の6月2日からすでに3か月以上が過ぎており、だんだん心配になってきた。そこで、ネットでそういう事例を探し、かつ、大使館に問い合わせた。そこで、変更した滞在期間が明記されている新しいDS-2019を受け取ること、それを大使館に郵送の上、領事のサインが必要ということだった。そこで、慌ててペンシルベニア大学の担当者に連絡をし、新しいDS-2019を再発行してもらった。このやり取りで出発日の延期を再度余儀なくされ、担当者の方にはさらに迷惑をかけた。

⁷ JETRO ビジネス短信「トランプ米大統領、一部の非移民ビザ取得希望者の入国を一時停止」
<https://www.jetro.go.jp/biznews/2020/06/029015b02a857d03.html> 2022年11月2日閲覧。

そのようにしてようやく準備がそろい、10月21日発、2021年3月10日帰着の日本航空のチケットを購入した。往路は羽田発、シカゴ経由、フィラデルフィア着、復路はフィラデルフィア発、ボストン経由、成田着であった。チケット購入は日本航空のオンラインサイトで、往復大人1人17万円⁸、子ども料金は少し安いいため、家族4人で合計約60万円ほどであった。本特集の李報告、スルナ報告やユニバト報告にあるようにチケット代が高騰するという事もなかった。

問題は滞在先である。2020年10月下旬から2021年3月までの滞在では5ヶ月にも満たない。日本でもそうであろうが、賃貸5ヶ月だけのアパートを探すのは大変むずかしい。またあっても、家具付きでなかった。短期滞在のために家具をすべてそろえることに抵抗もあった。そこで、ホームステイ仲介サイトや民泊紹介サイトを使って、家具付きの部屋もしくはホームステイ型の滞在先を探すことにした。筆者はおよそ20年前の1999年にアメリカのネブラスカ州オマハ市に短期で語学留学したことがあり、ホームステイをしていた。ホストファミリーとの交流は大変よい経験になったため、できれば家族、特に子どもたちにホームステイの経験をと考えたのである。結局、民泊紹介サイトでホームステイ形式の部屋を見つけ、先方も受け入れてくださり、そこに決めた。立地はフィラデルフィア市郊外だった。

出発日の数日前に、おじの訃報がはやり、夫の助言もあり、出発を1週間後の10月28日出発に延期することにした。チケットは日程変更不可の一番安いものであったが、コロナ禍で日本航空はすべてのチケットの日程変更を無料で可能としていた。そのため、追加料金が発生せずに済んだ。ホームステイ先も訃報による延期を快く認めてくれた。

千葉大学は海外渡航を原則として見合わせるとしていたが、感染予防及び感染時の対応について万全を期すということでサバティカルにおける筆者の海外渡航を認めてくれた。

2. アメリカへ

入国

本特集の他の報告を見るとわかるように、中国の水際対策は厳しく、PCRの陰性証明が必須であった。中国入国後の強制隔離も2週間以上に及んでいる。しかし、アメリカは当時入国に際し、PCR陰性証明は不要で、かつ隔離もなかった⁹。

出発当日、自宅より最寄りの千葉駅から出ている空港リムジンバスで羽田空港に向かった。

⁸ 2022年10月現在、同日程で検索すると燃料費込みで往復大人1人約34万円とほぼ2倍となっており、とりわけ、燃料費が約13万円と高くなっている（日本航空のウェブサイト <https://www.jal.co.jp/jp/ja/>により検索）。

⁹ 米国疾病予防管理センター（CDC）が全世界から空路で米国へ入国する者に対し、新型コロナウイルス検査の陰性証明書の提出を義務付けたのは2021年1月26日からである（JETRO ビジネス短信「米CDC、1月26日より海外からの航空旅客に新型コロナウイルスの陰性証明提出を義務化」<https://www.jetro.go.jp/biznews/2021/01/517b75489b38848d.html> 2022年11月2日閲覧）。

出発前に海外旅行保険が家族にも付帯されるため、ゴールドカードに入会していた。ゴールドカードでは空港のラウンジが無料で使用できるはずであった。しかし、あまりに人がいないせいか、閉まっていた。

羽田空港からシカゴに向かった便はがらがらで、キャビンアテンダントさんによると、乗客わずか13名ということであった¹⁰。コロナによる航空会社への経済的な打撃の大きさを実感した。

道中、乗客も含めてみなマスクを着用していた。ただし、中国行きの飛行機に搭乗した本特集のスルナの報告にあるような防護服を着ている人、感染防止メガネをかけている人はいなかった。

シカゴ空港では国際線はもとより、国内線もあまり人がいない印象であった。入国審査及び乗り換えもとにかく空いているため、とてもスムーズに進んだ。

シカゴ空港でとくに何の行動制限、注意喚起もなかった。空港内ではほぼみなマスクを着けていたが、布マスクも少なくなく、ネックウォーマー型のフェイスマスクをしている人が少なくなかった。

入国後、行動制限も行動管理も一切なかった。

ホームステイ先の家族

フィラデルフィア空港到着後、夫が事前にスマホにインストールしておいた Uber と呼ばれる配車アプリでホームステイ先まで行く車を手配した。夫の携帯はソフトバンクで、ソフトバンクはアメリカで追加料金無しで Wi-Fi が使い放題であった。空港でもすぐに使用できた。Uber で申し込むとあっという間に車が到着し、運転手は合計 8 個もある大量の荷物を載せるのを手伝ってくれた。

空港から Uber で手配した車に乗って、窓から外の風景を眺めていると、ちょうど大統領選挙前ということもあり、ほぼみな戸建ての庭の前には支持する大統領候補者の名前を書いたヤードサインと呼ばれる立板看板が立ててある。なんと、それはすべて青色のバイデンであった。日本では、バイデンとトランプの支持率は拮抗状態にあると報道されていた。そのため、夫とともに驚きをもって「バイデン」、「バイデン」と書かれたヤードサインを見ていた。また通りには「Black lives matter」などのプラカードを持っている人もいた。車がホームステイ予定の家の前で停まると、そこは大きなアメリカ国旗が掲げられ、赤色の「トランプ」のヤードサインが立っている家であった。私たち家族を受け入れてくれた夫婦はトランプ支持者だった。おまけにマスク無しで家から出てきて私たち家族を迎え入れてくれた。このコロナ禍で外国からやってくるアジア人家族を受け入れてくれること自体、稀有なことであり、トランプ支持者であるがゆえに受け入れてくれたともいえる。とはいえ、ホストファミリーはスーパーなどの屋内施設に入る際にはマスクを着用していた。ホストファミリーはヤードサインから近隣で唯一といえるトランプ支持者であったが、他から嫌がらせを受けるなどもなく、孤立

¹⁰ 便名は JL010 便、ボーイング 777-300ER (773) のエコノミークラスの定員は 147 名
(日本航空ウェブサイト <https://www.jal.co.jp/ja/aircraft/conf/777.html> 2022 年 11 月 2 日閲覧)。

していると感じることもなかった。

また、他の家族が筆者ら家族を全く受け入れてくれそうになかったわけではない。もう1家族、ホームステイ形式で筆者ら家族の受け入れを申し出てくれた家族があった。アフリカ系アメリカ人の、子供が2人いる家族で、食事がついていて、車のレンタルも可能で、料金も大変魅力的だった。しかしながら、部屋は地下の1室のみで、キッチンと浴室もついていたが、このコロナ禍でオンラインがメインになり、部屋に家族でこもりがちになることを考えると、かなりむずかしいと思ひ躊躇しているうちに連絡が途絶えてしまった。どうやら他の家族を受け入れたようだった。今思えば、1ヶ月だけでも住んでみて様子を見てよかったと思う。

ホームステイ先家族は70代の白人夫婦で、ホストファザーはいろいろな職を経験したらしいが、最後は経理財務マネージャー、ホストマザーは博士号をもち、単著を3冊も出版しているセラピストである。ホストマザーは他にも2つの財団のディレクターを受け持ち、NPOで性的人身売買を立ちあげたという。さらに、ホストマザーの父は医者、母は芸術と音楽の2つの修士号をもっていたという。ホストファザーに持病があることもあり、家事から民泊経営、家族のことなどすべてホストマザーが仕切っていた。のちに、高学歴者でトランプ支持者は珍しいと聞いた。

ホームステイ先は2階立ての1軒屋で、2階の寝室2室とバスルーム1室を占有した。1階にあるキッチンは共有で、食事は別だった。地下室もあり、地下室には洗濯機と乾燥機などがある物置とバスルーム付きの寝室兼書斎1室があった。

ホストファミリーの食事はレトルトや出来合いのものが多く、ほとんど調理をしていなかった。この点は筆者が1999年にホームステイした家族と違って、当時60代だったホストファミリーは朝晩必ずホストマザーが調理し、筆者も一緒に食事をとっていた。さらに、熱心なプロテスタントで、食事の前には必ずお祈りをしていた。このホストファミリーも熱心なプロテスタントであったが、食事の前にお祈りしているのを見たことがなかった。ちなみに、ホストファミリーはプロテスタントのなかでも福音派で、福音派はトランプ大統領（当時）の強固な支持母体である（松本2021）。

今回の滞在を振り返ると、ホストファミリーとコミュニケーションをよくとっていたとは言えない。その理由としては、私以外、英語がほぼできないこと、こちらが家族連れだったことがある。だが、最も大きい理由と一緒に食事をとってなかったことが大きいと思う。というのも、筆者が以前ホームステイしていた時にホストファミリーとよく会話をしていたのはやはり食事どきだったからだ。

ほかに、大型犬1頭とネコ1匹がいて、室内で飼っていた。大きな犬を日本で見たことなかった子どもたちははじめとても怖がって大変だった。上の子は最後まで慣れなかった。

インターネットは完備されていて、回線が切れるということは一度も無かった。テレビはどの部屋にも完備されていた。テレビは地上波ではなく、ケーブルテレビであった。テレビの画面上でアプリをダウンロードし視聴するというもので、ほとんどのサイトが有料でかつ登録が必要だった。ホスト

ファミリーが料金を支払っているサイトは無料で見ることができた。20 年前のホストファミリーの家にはテレビは 1 台しかなく、それもリビングルームにだけで、地上波のみだったのを考えると、隔世の感があった。

到着後、立地が郊外であるため、車がないと不便だなと感じていたところ、ホストファザーのホンダのオープントラック 1 台をレンタルできるようになった。そのおかげで、車で市街地や他の都市に買い物やドライブに行くことが可能になった。

3. アメリカ滞在

大学訪問

入国から 2 週間たった 11 月 13 日にペンシルベニア大学に行った。さまざまなサービスはインターネット上で使えるようになっていたものの、ID を取得するには大学に行き、かつ、担当者のサインが必要とのことで、その方が出勤する金曜日に大学に行くことになった。

ホームステイ先近くの駅から電車で向かった。電車は日中 1 時間に 1 本しかなく、ホームで待っている人は数人いたものの、乗り込んだ車両はがらがらだった（写真 1）。座席には所どころに x シールが貼ってあった。

大学構内でアトウッド先生と待ち合わせをした。再会のときのあいさつがまず肘タッチだった。また、ワクチンへの言及があった。日本ではまだワクチンへの期待感より警戒感が強かったので、印象的であった。他方で、ホストマザーに 2021 年 2 月ごろにワクチンを打つのか聞いてみると、これまでの人生でワクチンを一度も打ったことがない、家族もそうだと語り、ワクチンに対する考え方の違いを感じた。

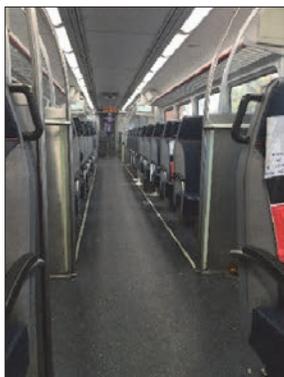


写真 1 電車内の様子

アトウッド先生の案内で、学部の建物へ入る。キャンパス内はそこそこ人がいるが（写真 2）、建物内はほぼゼロであった。

大学の校舎に入るにはアプリで事前登録が必要になっていた。アプリで発熱は無いか、咳などの自覚症状がないかなどの簡単な設問があり、すべてノーと答えるとグリーンの色が表示される。各校舎の入り口には人がいて、その人にそのアプリのグリーン画面を見せて入館が許可されて入るといった形になっていた。

まず、アトウッド先生の研究室を見学させてもらう。その後、学部事務室に行き、ビザの手続きをしてくださった担当者にお礼を述べ、書類手続きを済ませた。担当者の方は筆者たち家族と十分に社会的距離をとるように気を使っていた。

結局、これが最初で最後の研究室訪問であった。

次に、IDカードを発行してもらうため、大学ストアに向かった。大学ストアでは入り口に消毒液が設置してあったものの、中身は空で、こんなものかと思った。大学ストアは1階と2階に大学関連グッズと本屋、ほか2階にオフィスがあった。

そのあと、アトウッド先生に大学近くの古本屋を2軒紹介してもらった。どちらも充実したものだだった。



写真2 ペンシルベニア大学図書館前 図書館はコロナ禍で閉館していた。

ペンシルベニア大学の新型コロナ対応

ペンシルベニア大学の授業は完全にオンラインだった。アトウッド先生の授業はZoomによるゼミ形式のものと、動画配信とZoomによるゼミ形式を併用した2つがあった。どちらのゼミでも学生は大変熱心で、議論は活発であった。ゼミでとりわけよいと思ったのは、事前にアップした文献を受講者全員が目を通したうえで、ゼミでは議論する、という形式である。これまで自分のゼミでは講読文献の担当を授業ごとに決め、担当者のみがその文献を読んでレジュメを作成して発表という形式であった。帰国後は大学院のゼミではこの形式に改めた。また、キャンバス (canvas) という授業補助サイトでは、授業資料をアップロードして共有するとともに、教員が提示した課題について学生各自が

コメントをし、議論をする場も設けられていた。

また、ペンシルベニア大学では学部生と院生と一緒に授業を受けることが制度的に可能となっており、アトウッド先生の授業では、動画配信とゼミ形式を併用したクラスがそれであった。学部生と大学院生と一緒に授業はより理解を深められることから学びの点で効果は大きいと感じた。

大学図書館にはコロナ禍で入館できないため、所蔵資料はスキャンによる PDF ファイルの無料提供がなされていた。また、オンラインで読める、もしくはダウンロードできる論文と本の数が圧倒的に多く、大変便利であった。ちなみに、千葉大学では授業に使用するものに限り、図書館所蔵資料の電子提供サービスを 2020 年 4 月より実施している。

家族でのアメリカの生活

アメリカでは、子どもたちは保育園などに通うことなく自宅で過ごした。保育園料は大変高額であるが、英語の勉強にもなるため、短期間でも子どもたちを保育園に入れようかと考えていた。しかし、子どもたちに通いたいかを確認すると、上の子が泣いていやがった。それで、家で過ごすことにした。預かってくれるところを探す前であったが、どのみちコロナ禍で預かってもらえなかったかもしれない。サランゲレル先生のすすめで、夫は日本語関連のボランティアをと考えていたが、コロナ禍でそうした機会は無かった。

滞在中、夫はネットで公園を探しては子どもたちを遊びに公園に連れ出してくれた。夫が子どもを連れて外出している間に、筆者はアトウッド先生のゼミの課題や研究資料の整理、論文作成などに集中することができた。ただ、ずっと家にいるのもつらく、夕方、子どもたちを連れて近くの小学校に併設されている公園によく通った。

ホームステイではほぼ自炊で、夫が調理を担当した。夫はキッチンでホストマザーと一緒にすることが多く、言葉の問題もあり、かなりのストレスだったようである。

実はこの過ごし方はアメリカに来る前のコロナ禍での過ごし方とほぼ同じであった。

買い出しには家族全員で行った。とくによく行ったのが郊外にある韓国系のスーパーマーケットである。ジャポニカ米、カレールー、韓国のり、生クリームのカッキーなど品ぞろえが充実していた。クリスマスイブには子ども閉まっているか、開いていても閑散としていたが、ここだけはとても混雑していて、客層はほぼアジア人だった。2021 年 1 月に入ると、フードコートも利用できるようになった。

アトウッド先生は滞在中もいろいろ気にかけてくださり、その時の感染対策の指針が許す範囲でクリスマスイルミネーションが美しい公園や歴史スポットに連れ出してくださった。また、感謝祭には奥様が自身の手料理をわざわざ持ってきてくださった。帰国間際には、自宅に招待して歓待して下さり、子どもたちはとてもなついていた。

感染対策と街の様子

アメリカでは疾病対策予防センター（以下、CDC）が行動指針を発表していた。CDCは11月の感謝祭やクリスマスは大型連休となるため、移動自粛とともに、友人、家族が集うのを避けるよう呼びかけていた。

マスクはN95をつけている人もいる反面、鼻出し、布製が多かった。

アメリカでは州や市ごとに対応がなされていたが¹¹、基本、感染者が増えてくると、消毒液やマスク着用に加えて、屋内飲食の制限などがかけられるようになっていた。たとえば、以前はなかったのに、スーパーの入り口に人が立って、マスクをしていない人に注意するようになっていたこともあった。また、屋内のフードコートで以前はできた食事ができないようになっていたこともあった。2021年2月に再訪した大学ストアー入口の消毒液もちゃんと機能していた。

公園、動物園、美術館、遊園地などはすべて事前にネットで入園日時を予約するようになっており、これにより人数制限をおこなっていた。ただし、実際の入口受け付けは自動化されておらず、人が確認していた。

日本のモールと構造は異なり、防犯上の理由だろう、モールなど屋内のショッパー一つ一つが閉ざされた空間になっているのだが、2020年11月頃は締め切っているところが多かった。日本ではすでにコロナ禍に対しては換気が重要とされていたにもかかわらず、である。そのかわり、どの店にも店舗面積に応じた入店可能人数を記した貼り紙があり、入店人数の制限をしていた。2021年2月ごろには変わらず入店人数の制限をしているものの、ドアを開け放している店舗がほとんどになっていた。店舗等の入り口のドアは、日本のような自動ドアは少なく、ほとんどが手動で押して入るものであった。こうしたところも感染源になったであろう。

コロナ禍でも会計時の会話は普通に行われており、たまに並んでいる客同士で話していることもあった。マスクをつけた店員がセールストークをけっこうな距離でしてくる店舗もあった。

ホストファミリーを見ていると、帰宅後に手洗いやうがいはいはしておらず、部屋の中でも土足であった¹²。

スーパーマーケットはオンライン注文を受け付けているところもあり、受け取り専用のパークエリアが設定されているところもあった。感染に気を付けている人は家にこもっているのであろう。

¹¹ ペンシルベニア州およびフィラデルフィア市の公衆衛生局（Department of Public Health）がその役割を担っていた。

¹² 2020年には室内での土足も感染源の一つと言われていた。たとえば、Forbes JAPAN「マスクを着け、靴を脱ぐ。新型コロナでニュー Yorker の習慣に変化」2020年5月16日
https://forbesjapan.com/articles/detail/34397?read_more=1 2022年11月30日閲覧、日経ビジネス「マスクの次は？欧州で広がる生活習慣の「アジア化」」2020年12月23日
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOFK215X20R21C20A2000000/>（2022年11月30日閲覧）。

ショッピングモールに何度か足を運んだが、ほぼがらがらであった。400店以上もあるという大きなモールにも行ったが閑散としていた。ブラックマンデーと呼ばれる全米第一のセール日にはかつてならセール品の奪い合いで救急車が出動したこともあったという。2020年に行ったアウトレットではそこそこ人はいたものの、混雑は見られなかった。店外まで行列ができているのはUGGの店舗くらいであった。それでもそれは店内に入る客数に制限をかけているからであった。

また、日本ではほぼ使用が禁止になっていたハンドドライヤーが普通に使えた。そのかわり、トイレを封鎖している、もしくは利用可能なトイレ数を制限しているところも少なくなく、トイレを探すのに苦労することがたびたびあった。

空き店舗の看板があがっている個人経営のショップもよく見かけた。コロナ禍以前を知らないため、増えたのか減ったのかは不明である。とはいえ、がらがらなショッピングモールと重ね合わせると、アメリカへの新型コロナによる経済的な大きな打撃を肌で感じた。

2021年2月に西北西に約500キロメートルに位置するピッツバーグ市に1泊ででかけた。ピッツバーグは街を囲むように河川が流れており、河川の外側は郊外になる。フィラデルフィア市ではそれほど感じなかったが、街の中心部は実に閑散としていた。おそらくオンライン化のためであろう、人の気配がない。反面、郊外はジョギングしている人や散歩している人がおり、にぎやかな感じがした。

ほかにアメリカで目に付いたのが、Family Dollarなど日本でいうところの100円ショップである(写真3)。ただし、日本とは違い、棚に商品がないことも多く、あっても乱雑な印象が強かった。



写真3 アメリカの100円ショップの一つ Family Dollar

滞在中、コロナに感染した人に会うこともなく、コロナ感染の恐怖というのを感じなかった。唯一これはと思ったのが、アメリカ版100円ショップで買い物をしているときに、1人咳き込んでいる人がいたときである。あわてて、マスクを二重にして、会計を済ませるとすぐに店を出た。

ファーストフード店やこうした店には「Hiring」が出ていることが多く、エッセンシャルワーカーの雇用需要は高いように感じた。また、エッセンシャルワーカーを激励するメッセージを見かけることが少なくなかった。たとえば、大手チェーン店には「HEROES WORK HERE (ヒーローはここで働

いています)」（写真4）、個人店での「Thank you Front line workers！（ありがとう、最前線で働く労働者たち）」などである（写真5）¹³。



写真4 マクドナルドの看板下には「HEROS WORK HERE」



写真5 カフェの前に掲げられた「THANK YOU FRONTLINE WORKERS!」という垂れ幕

日本企業の存在感

個人的に衝撃だったのは、こうした100円ショップでパナソニックの単3乾電池の2個入りが売られていたことだった。日本でパナソニックといえば、ブランド力のある会社、つまり100円ショップとは無縁の企業だと思っていたからである。

家電量販店の「Best buy（ベストバイ）」にも行ってみたが、日本企業の製品はあまり見かけなかった。強いて言えば、留守番電話機能付きの電話機くらいだろうか。ホストファミリーの家で使われている電化製品でも日本企業のものは自分たちが使っていた寝室の一つの壁掛けテレビがサンヨーだったくらいだった。

¹³ 医療従事者を英雄化することでその裏にある構造的な不平等や犠牲をうやむやにしてしまう欠点も指摘されている（関本幸「コロナ危機から見るアメリカー大学教育現場からの報告」Fieldnet 特設サイト COVID-19 とフィールド・ワーカー2021年1月6日（<https://fieldnet-aa.jp/covid19/%E3%82%B3%E3%83%AD%E3%83%8A%E5%8D%B1%E6%A9%9F%E3%81%8B%E3%82%89%E8%A6%8B%E3%82%8B%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%AA%E3%82%AB%E2%80%95%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E6%95%99%E8%82%B2%E7%8F%BE%E5%A0%B4%E3%81%8B%E3%82%89/>）2022年11月10日閲覧）。

逆に日本以上に目にしたのが日本車である。日本ではあまり見ない車種も含めて、たくさん走っていた。ほかに韓国車も多かった。逆に少ないのは欧州車である。

差別

新型コロナが中国に由来することもあるのだろう、2020年11月にスーパーマーケットチェーン店であるウォールマートでレジに並んでいる際に、会計をしている親子連れに「近づくな」と言われたことがあった。また、アウトレットで私たち家族が使っていた子供用カートを帰宅するので別の家族に渡したことがあった。その家族はこちらのカートを受け取ると念入りに消毒していた。とはいえ、なにかしら差別的な言葉を投げつけられるようなことは無かった。その理由の一つは自分が常に夫とともに行動していたためだと思う。というのは知り合いの小柄なアジア人女性は1人の時に2度ほど差別的な言葉を投げつけられたという。1回は車を運転しているときでクラクションを鳴らされてという。もう1回は郵便局の前であったという。どちらも白人男性だったとのこと。2001年のアメリカ同時多発テロ事件のときはイスラム教徒への反発が広がったが、大統領が率先してメッセージを発して守った。ところが今はトランプ大統領が率先して差別を扇動していることが大きいという。

こうした差別に対して社会的なメッセージを送っていたのがペンシルベニア大学である。ブラックライブスマター運動が起きると、大学からすぐに差別に反対する旨の声明が送られてきた¹⁴。それは新型コロナでもしかりで、励ますメッセージや配慮あるメッセージは心強いものだった。また、ホームステイ先の近所の家では家の中に外から見えるところや外に、「BLACK LIVES MATTER」の立板を立てている家が少なくなかった。なかには「HATE HAS NO HOME HERE」というメッセージもあった（写真6）。これにはハートの形をしたアメリカ国旗の下にこのメッセージが英語にくわえて、ワールドゥー語、韓国語、ヘブライ語、アラビア語とスペイン語が併記されている。



写真6 「HATE HAS NO HOME HERE」のメッセージ¹⁵

¹⁴ ペンシルベニア大学の International Student & Scholar Services から個別に送られてきたもの。

¹⁵ 同デザインは <https://hatehasnohomehere.wordpress.com/download/artwork/>より無料でダウンロード可

その一方で、ペンシルベニア大学からセキュリティメッセージもよく来ていた。それはキャンパス付近で強盗など事件が発生すると、「○○で武装強盗発生、警官が現場にいるため、このエリアを避けて行動してください」というものである。しばらくすると、「大丈夫です、警官がパトロールしています」と安全になったことを知らせるメールが送られてくるのだ。とくに行動制限が緩和し始めた2021年1月以降に増えた。さすが、アメリカ社会における黒人格差を描いた若き社会学者アリス・ゴッフマンのエスノグラフィー『逃亡者の社会学』（2014）の舞台だと思った。このエスノグラフィーの具体的な場所はペンシルベニア大学のキャンパスからさほど遠くない低所得者層が暮らす黒人居住地区とされている（ゴッフマン 2021 : 12）。実際、車でフィラデルフィア市内を走っていると、明らかに他と違う、ゴミが散乱し、なんとなく雑然とした一画がいくつかあることにすぐに気が付いた。実際にこの本の舞台とされる6番ストリートがどこにあるのかは分からないが¹⁶、そうした地区が可視化されていることは明らかである。加えて、この研究の舞台のすぐそばにあり、若き女性社会学者が所属していたペンシルベニア大学はアメリカではアイビーリーグと呼ばれる著名な私立大学の一つで、超エリート校である。それは想像以上で、大使館のビザの面接で面接官は筆者の受け入れ大学がペンシルベニア大学ということを書類で認めると、まさに驚嘆の表情をしたので、そんなにすごい大学なのかと逆に驚いたくらいであった。この本は大きな話題を呼び、かつ、また大きな批判にさらされたが（前川 2017 ; 邦訳解説）、その背景の一つにアメリカの格差社会のなかで対局にあり、きわめて身近に存在しながら本来ならば決して交わることがない超エリートの若い白人女子大学院生と低所得層地区の若い犯罪歴がある黒人男性の「交流」を鮮やかに見せてしまったことにあるのではないかと思う。

ちなみに、このセキュリティメッセージは大学の **Public Security** という部局から送られてくる¹⁷。しかも、同部局からコロナ感染拡大への注意喚起のメールも送られてきていた。そこに励ましのメッセージは無かった。

情報源と大統領選・国会議事堂襲撃事件

アメリカ出発前までアメリカの様子を知るのに参考にしていたのが **BS 朝日** で放送されている「町山智浩のアメリカの今を知る **TV in Association With CNN**」である。コミカルな進行であるが、政治から経済、映画などを通じてアメリカ事情とその背景を伝えてくれる番組で、大変参考になった。

実質的な情報源として参考にしたのは、ペンシルベニア大学の名門ビジネススクール、ウォートン

能（2022年11月30日閲覧）。

¹⁶ インターネット上では事件の起きた場所等、ほぼ特定されているという（前川 2017 : 35）。

¹⁷ **Division of Public Security** <https://www.publicsafety.upenn.edu/> 本サイトでより詳細なセキュリティメッセージが確認できる。

校に通う日本人が中心となって運営しているクラブのホームページ¹⁸である。日本人受験者、合格者向けにビザなどさまざまな情報が網羅的に掲載されている。2019年10月にブログで小さいお子さんがいる、家族で渡航滞在中にされている方がいたので、メールで相談したりもした。結局、短期での滞在中になったため、利用しなかったが問い合わせしていた不動産会社を紹介してもらった。また、子連れ渡航にかかる注意事項についてもアドバイスをいただいた。

アメリカ滞在中の情報源はツイッターが主であった。アメリカに到着してすぐにツイッターの広告でバイデンと副大統領候補者であるハリスのPR映像が流れてくるようになった。滞在地がアメリカになったことで、広告内容がアメリカ向けになったようであった。

ほか重宝したのは在ニューヨーク日本国総領事館から送られてくるメール連絡で、コロナ対策や治安情報など参考になるものであった。

大統領選については、フィラデルフィアの市街地ではパレードも行われたようであるが、郊外に住んでいる筆者たちには全く無縁であった。

ホストファミリーの家ではディズニーチャンネルを見ることができたので、こどもたちはよく見ていた。夫も日本のテレビアニメをよく見ていた。そんななか、テレビが地上波でないこともあり、意識的に見るようにしないとニュースが入ってこない。そこで途中から、ニュース番組を意識的に見るようにした。滞在中よく見るようにしていたニュース番組はABCのWorld News Tonight with David Muirである。ただ、この番組、世界のニュースといっても、ほぼ毎日といっていいくらい3分の1はアメリカの気象とその災害についてで、アメリカでこんなに自然災害が多いのかと驚いた。

ホストファミリーが見ているテレビ番組はほぼ上述の町山智浩に「大政翼賛テレビ局」(2021:239)と称されるFOXカススポーツ番組であった。

1月6日の国会議事堂襲撃事件では、ホストファザーがいつものFOXでトランプ大統領の演説を聞いていたのを見ていた。その後、自分の関心は上院議員選挙で民主党と共和党のどちらが有利に勝つかに興味があり、専有の寝室にむかい、そこのテレビで民主党が勝ったことが分かると、テレビを消してしまった。それからしばらくして、何気なくツイッターを見てみると、国会議事堂に侵入しようとした女性が銃で撃たれた映像が流れてきた。ただ事でないことが分かった。

アメリカではすでに地上波がなく、ケーブルテレビで好きな番組だけ見るといのは情報源が偏る、場合によっては情報が入って来なくなるということを痛感した。また、インターネットに接続されているため、視聴者がどの番組を見ているのか、筒抜けであろう。

¹⁸ Wharton Japan Club <https://www.wharton-japan.net/> 2022年11月30日閲覧。

4. 帰国へ

PCR 検査

帰国予定日は 2021 年 3 月 11 日であった。2021 年 1 月には、日本で感染者が急激に増えてきたため、日本は海外からの入国者に対する対応が急激に変わってきた。入国後 14 日間の自宅等での待機に加えて、入国に際しての PCR 検査の陰性証明が求められるようになったのである¹⁹。検査証明が提出できない者に対しては、自宅待機前にホテル等で 3 日間過ごすこととされた²⁰。PCR 検査が陰性でも、どのみち入国後 14 日間の自宅待機が求められることから、3 日間ホテルで過ごすのであれば、それもよいのではないかと考えた。しかし、その費用負担やホテルの隔離状況についてよく分からない。厚労省の担当窓口で電話で確認相談すると、ホテルでの待機で宿泊費用の自己負担は無し、買い出し等についてはホテルによる、割り当てホテルは事前には分からないとのことであった。また、航空会社に問い合わせると、日本航空はオペレーターがあまり状況をよく把握していないようで、かつ、責任を追及されると困るので安易な発言はしない、というような態度であった。結局 PCR 検査の陰性証明はなくても問題ないが、アメリカの国内線はアメリカン航空であり、対応が異なるのでそこに問い合わせるように言われた。そこで、アメリカン航空に問い合わせると、こちらのオペレーターは仕事に裁量があるようで、現状問題ないが、随時情報を確認するとともに、チェックインカウンターで最新のHP情報を提示しながら、交渉したほうがよい、との回答であった。そこで、PCR 検査を受けなくてもよいのではないかと考えていた。

ところが、3 月 5 日になると、「水際対策強化に係る新たな措置（9）」が厚労省から出された。その内容は、PCR 検査証明不保持者については、検疫法に基づき上陸等できないこととし、これにより、不保持者の航空機への搭乗を拒否するよう、航空会社に要請することとなっていた。

帰国日時点では、必ず搭乗が拒否されるわけではなかったが、もしものことを考え、やはり PCR 検査を受けることにした。ところが、出国 72 時間以内に検査を受け、出発前までに陰性証明を発行してくれるところがなかなか見つからない。そこで、同じようにコロナ禍にアトウッド先生の下に *visiting scholar* として滞在しており、既に中国に帰国した研究者に連絡をとり、検査場を教えてもらった。そこはホームステイ先から車で 50 分ほどの場所にあるところで、1 日ばかりで車で検査を受けに行った。大人子ども関係なく 1 人 198 ドルであった。検査形式は鼻咽頭ぬぐいによる検体採取で、かなり痛く、子どもは泣いていやがっていた。検査担当者は防護服に身を包んでいたが、アメリ

¹⁹ 2021 年 1 月 8 日に出された「水際対策強化に係る新たな措置（5）」による。

²⁰ 水際対策強化に係る新たな措置（5）では、検査証明を提出できない者に対しては、検疫所長の指定する場所での待機を求め、入国後3日目において、改めて検査を行い、陰性と判定された者については、位置情報等の保存等について誓約を求めるとともに、検疫所が確保する宿泊施設を退所し、入国後14日間の自宅等での待機を求めることとする、とされていた（厚労省「水際対策強化に係る新たな措置（5）」2021年1月8日 https://corona.go.jp/news/pdf/mizugiwataisaku_20210108.pdf 2022年11月28日閲覧）。

カで防護服を着ている人を直接見たのはこれが最初で最後であった。当日、正午近くに検査を受けて、午後4時には結果と検査証明を受け取ることができた。これが家族全員初めてのPCR検査で、全員陰性だった。

日本に帰国後、筆者も含めて家族はこれまで数回のPCR検査を受けているが、検査から結果が分かる時間はこれがかなり早い方であったことを帰国後つくづく思い知ることになる。

身分は2021年8月まで継続

帰国は2021年3月であったが、2021年8月に再訪することを視野に入れ、ペンシルベニア大学にvisiting scholarの身分を2021年8月まで残すことにした。その背景には、ペンシルベニア大学の図書館をはじめ、研究環境が充実していることと、オンライン化が進んでおり、コロナ禍で日本に帰国しても身分を保持することが可能であったからである。結局、2021年8月に再訪することはかなわず、身分も2021年8月までとした。

帰国

帰国日当日、ホストファミリーの車で空港まで送ってもらった。

アメリカン航空のチェックインカウンターでまず必要とされたのはPCR検査の陰性証明であった。これがないと搭乗を許可できないという。PCR検査の陰性証明を取っておいてよかった、とつくづく思った。また、その時つけていたN95のマスクはフィルターがついているもので、これでは搭乗できないと言われた。理由を聞いたが、分からないとのことだった。このN95マスクはホストファミリーの長男からもらったものだった。日本で感染が拡大していることもあり、どこかでN95を購入しようとしたが、どの店にも無かった。そこで、ホストファミリーに相談したところ、ホストファミリーの長男が救急車の運転手をしていることから、N95マスクを2つほど手に入れてきてくれたものだった。結局、普通のマスクをつけて帰途に就いた。

フィラデルフィアからボストンまでの国内線はほぼ満席だった。

ボストン空港では入国時と違い、かなり人がいて、食事をとっていたり、にぎやかな印象を受けた。ところが、ボストンの国際線はまったく人気がなかった(写真7)。食事どころには客がいなくて、カウンターにも人がいない。店員を呼んで聞くと、商品はほとんどない、とのことだった。

それでも帰りの飛行機は、ビジネスクラスはほぼ満席、エコノミーもそこそこ人がいて、ほとんど日本人だった。新年度にあわせて帰国する人が多かったためであろう。

日本に着くと、唾液による抗原検査を受け、陰性が確認された。

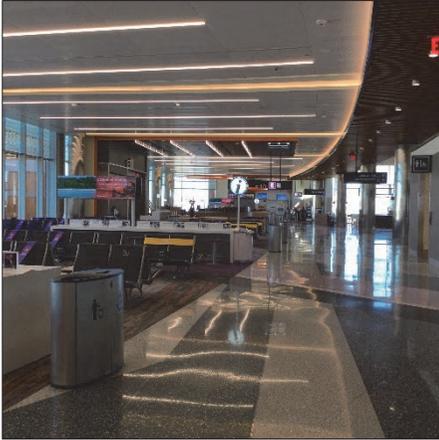


写真7 ポストン空港の国際線ターミナル
がらがらで人はほとんどいなかった。

帰途にはレンタカーを利用した。というのは公共交通手段を使わないようにとされていたため、違反すると「名前を公表する」となっていた。社会的な責任を脅迫材料に使うようなやり方に反発を正直覚え、また、どうやって管理しているのか不明で、普通に電車に乗って移動できるようにも思えた。しかし、大学から強い要請を受けていたこともあり、公共の交通手段を使わなかった。レンタカーをネットで予約し、その日のうちに自宅に着いた。

帰国時に、国交省が帰国者を対象としたアンケート及び自宅における PCR 検査モニターを募集していたため、家族を代表して筆者だけが受けた。申し込むと、3 回分の検査キットが郵送されてきて、帰国から 3 日目、6 日目、14 日目に唾液を専用の容器に入れて郵送で送り、メールで検査結果を受け取るというものであった。どれも結果は陰性であった。

筆者たちの帰国後から、アメリカではワクチンが広く受けられるようになっていった。そのころには日本でもワクチンへの警戒感はすっかり薄れており、筆者たちももう少し長く滞在出来たら打てたかもねと話したものだ。

5. コロナ禍のアメリカ滞在を振り返って

なぜ渡航したのか

本稿を書きながら改めて考えたのは、筆者たちはなぜコロナ禍にアメリカへ渡航したのか、ということであった。まず大きいのはすでにビザを取得していたため制度的に渡航可能だったことである。アメリカでは、入国を決めた 8 月と 9 月には厳しいロックダウンは解除され、入国制限も移動制限も隔離もなかった。受け入れ先のペンシルベニア大学は 6 月以降の入国について、制限を何もかけなくなっていた。経済的な新たな負担もなかった。何より、先述したように家族全員にとってコロナ禍とはいえ、かけがえのない機会だったということがある。とはいえ、短期の出張であれば、渡航を中止していたであろう。

アメリカと日本の新型コロナへの対応の違い

アメリカのコロナ対応は公的機関である CDC が科学的なデータに基づき、指針をだしており、それにより対応がなされていた。また、個人を規制するというよりは、公共施設への指示を徹底しており、各店舗への入室可能人数が定められるなど、科学にもとづく対策が明確であった。

日本に戻ってくると、それがない。たとえば、千葉大学では、2021 年度からいわゆる教養科目で大人数のところはメディア授業であったが、それ以外の授業形式は 40 名程度を目安としながらも判断はあくまでも担当教員に委ねられていた。感染状況を見て、各教員がオンラインにするのか、対面にするのか、個人の判断にもとづいて決めるのだ。その根拠はというと、責任が教員の判断に帰せられることから、どうしても慎重になりがちで、私自身、受講生からの要望、感染状況や受講生数、使用教室の大きさなどを勘案し決めていた。その基準は「なんとなく」としか言えないものであった。これは授業内容や新型コロナの感染状況に応じて、柔軟な対応が可能となっていたともいうことができる。しかし、それに振りまわされるのはさまざまな個別事情をもつ学生で、誰にでも分かりやすい科学的な根拠に基づく明確な基準があるべきだろうとつくづく思った。たとえば、教室〇㎡であれば、〇人の対面授業は安全である、という明確な指標があれば、判断が容易であっただろう。こうしたなかで、2021 年度の受講生 30 名ほどの講義では、できるだけ対面と同時双方向型の併用にし、場合によっては録画での視聴可とした。ただ、これは教員の作業負担が大きい。具体的には PC とウェブカメラのセッティング、Wi-Fi と Zoom の接続で、授業開始 20 分以上前から教室にきて準備する必要が生じた²¹。集音マイクも使用できたが、あまりうまく機能しなかった。そのため、教室参加の学生が授業で発言する際にはティーチングアシスタントが毎回マイクを消毒しながら発言者に渡すようにした。録画視聴の場合、録画データをそのまま配布するのははばかれたため、3 分割したうえで、動画管理サイトにアップロードし、希望者にその URL を連絡した。

科学的根拠に基づく明確な対策がなされないことは千葉大学の問題ではなく、国の問題である。日本には「政府への信頼」もなければ、「国民相互の信頼」もないにもかかわらず(宮台 2021: 255-256)、いやだからこそか、心配や恐怖心による行動抑制を施策としているのだ。アメリカからの帰国後、一番感じたのはこの点であった。

さらに言うと、政府のトップが責任を取らない。アトウッド先生と知り合ったモンゴル国でのシンポジウムのテーマは 1939 年に起きた日本ではノモンハン事件とされるハルハ戦争で、この問題の一つは関東軍の最高責任者が責任を取らないことで (Cf. 五味川 1975)、それに通じるものを感じた。

そしてもう一つ感じたのが新型コロナに対するメッセージである。ペンシルベニア大学からのメールはコロナに関して注意喚起するもあったが、励ましや支援を主としたものであった。一方で、千葉

²¹ ハイブリッド方式も含めたコロナ禍における「リモート」学習の困難については沖正 (2022) に詳しい報告がある。

大学では感染注意への呼びかけやコロナ関連の研究公募などであった。もちろん、立場の違いがあり、受け取っているメールの差は大きいと言える。それでも読み手への共感というべきものももっとあってもよいのにと感じた。

おわりに

最後に、改めて感謝の意を記してこの報告を締めくくりたい。

まず、コロナ禍においても家族連れの筆者を受け入れてくださったアトウッド先生である。また、民泊でビジネスという面があるにしても、小さい子連れ家族を受け入れてくださったホストファミリー。そして、ホームステイを受け入れてくれた筆者家族に。言葉が通じない他人と生活を共にする苦労は大きかっただろうと今更ながら思う。コロナ禍で教員の国内出張でさえも認めない大学があった中で、海外渡航を認めてくれた千葉大学とサバティカルを支持してくださったコースの先生方にも感謝の意を表したい。ここに名前を記さないが、家族でのアメリカ渡航には多くの人の支援を受けて可能になったものである。

本報告にある海外渡航は JSPS 科研費 18H03608 と 17K03274 の助成を受けた。

引用文献

沖正昌樹 (2022) 「コロナ禍と哲学5」 森達也編『定点観測新型コロナウイルスと私たちの社会 2022 年前半』論創社, 117-138.

ゴッフマン, アリス、二文字屋脩・岸下卓史訳 (2021) 『逃亡者の社会学: アメリカの都市に生きる黒人たち』亜紀書房 (Goffman, Alice. (2014) *On the run: fugitive life in an American city*. University of Chicago Press) .

五味川純平 (1975) 『ノモンハン』上下、文藝春秋.

前川真行 (2017) 「公正と信頼のあいだ: アリス・ゴフマンのケース」 *RI: Research Integrity Report*. 2: 14-38.

町山智浩 (2021) 「新型コロナ日記 イン アメリカ 2」 森達也編『定点観測新型コロナウイルスと私たちの社会 2020 年後半』論創社, 227-250.

松本佐保 (2021) 『アメリカを動かす宗教ナショナリズム』筑摩書房.

宮台真司 (2021) 「コロナ禍は社会の性能を示す オルタ・テックの可能性」 森達也編『定点観測新型コロナウイルスと私たちの社会 2020 年後半』論創社.

Overseas study in the U.S. during the COVID-19 pandemic in 2020-2021

KODAMA Kanako

I stayed in the United States with my family of four as a visiting scholar at the University of Pennsylvania for about four months, from October 2020 to March 2021, on a sabbatical. My family consisted of myself, my husband, and my two children (aged 5 and 3 as of October 2020). During this period, we stayed with a Caucasian couple aged in their 70s, whom we had found through an accommodation website. I report on our stay in chronological order; the preparation for the U. S., our stay, and the return to Japan. ‘Our stay’ includes a visit to the University, the University's countermeasures during the COVID-19 pandemic, family life, infection control, the city's state, the presence of Japanese companies, discrimination, and our sources of information and news media. Finally, I review our overall stay in the U.S. during the COVID-19 pandemic.